ＮＰＯ法人　ルワンダの教育を考える会ニュース　　発行　２０１０．４．１

ウムチョ　ムゥイーザ通信　No. ２４

ルワンダ語で「良い文化学園」の意味を表します。

追悼「高橋啓子理事長」

ＮＰＯ法人ルワンダの教育を考える会
理事長代理　カンベンガ・マリールイズより

出会いはすべての始まり

1987 年に私が勤めていた専門学校に日本人の先生が来てくれました。彼女はＪＩＣＡの青年海外協力隊の隊員でした。彼女が来たことによって「日本」に関心を持つようになりました。

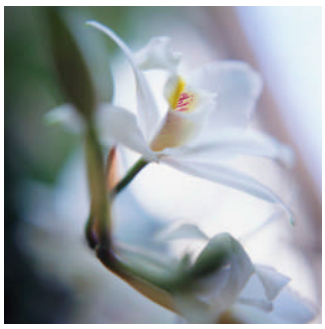
２年後には彼女の後任である宍戸（旧姓坂本）なつ美さんが来てくださったのが「始まり」です。なつ美さんは福島文化学園の卒業生でした。一緒に働いた２年間がとても楽しかったです。
彼女が帰国する前に、日本で私が研修出来るようにＪＩＣＡルワンダ事務所に推薦してくれました。さらに、日本の受け入れ先も働きかけてくれました。

福島文化学園の受け入れによって私の「今」があります。その福島文化学園の校長先生であった高橋啓子先生の「はい、受け入れます」の一言が、私に夢をくれました。

福島県の洋裁の技術研修生として 1993 年初めて日本に来ました。高橋啓子理事長先生と初めて出会ったのは 1993 年の４月です。不安を打ち消すような「笑顔」で私たちを迎えてくれました。私の他にはアフリカのマラウィという国からも来ていました。楽しかった研修期間の日々を忘れることは出来ません。

1994 年の１月に研修が終わりました。そして２月に帰国しましたが、４月６日にはルワンダの内戦と大虐殺が始まりました。

家にいられなくなり、難民キャンプに逃げた私たち家族のために高橋啓子先生や研修生期間に出会った福島の友人たちが心配してくれました。そして、ルワンダの内戦の様子を伝えようとして隣国ゴマの難民キャンプに来た新聞記者やＮＧＯの職員を探し、福島の友人たちに私が難民キャンプにいることを伝えてくれるように頼みました。とてもうれしかったです。



私たち家族が 1994 年 12 月 28 日に、日本に来てから今に至るまで、言葉に言い切れないくらい、さまざまな支えを受けてきました。心から感謝しています。

私たち家族の他にもルワンダの子ども達のことも、心に留めてくださって、「ルワンダの教育を考える会」を立ち上げたときの理事長の言葉が忘れられません。私個人がルワンダの学校を造る活動をしていて一人の力の限界を感じて、理事長先生に相

談しに行きました。そのときの先生の言葉が私をここまで支えてくれました。「ルイズさん、あなたがやらなければ誰がやるの？いつもそばにいますから、頑張ってください」と言われて心強かったです。本当にずーっとそばにいてくれました。どんなときも励ましてくれました。

あるとき、日本に滞在するためのビザ取得の問題がありました。そのときに夫を文化学園の職員として 1 年間採用してくれました。職が安定したことによって私たち家族が安心して暮らすことが出来ました。だから、私たち家族にとって高橋啓子先生は「母親」のような存在でした。

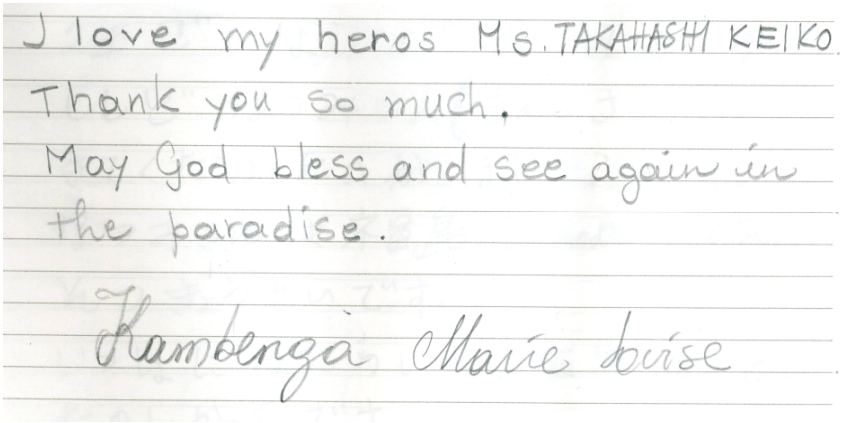
高橋啓子先生、夢をありがとうございました。ルワンダに学校を造る夢を実現出来たのも高橋啓子先生のおかげです。ルワンダの教育を考える会の立ち上げから今に至るまで「理事長」という立場で導いてくださいました。

ある日ルワンダへ行き、子ども達に「大きくなったら何になりたい？」とたずねました。そして答えは悲しかったです。「大きくなるまで生きているの？」と聞き返されました。本当に悲しかったです。でもそのときから私の夢が決まりました。いつか子ども達に「成りたい夢を見つけさせたい。」と心に誓いました。その実現のために高橋啓子先生はいつも一緒に考え,そばにいてくださいました。本当に限りない感謝の気持ちでいっぱいです。

高橋啓子理事長あなたは本当にヒーローです。あなたと出会えて私は幸せです。誇りに思っています。

「教育は平和と発展のかぎ」そのかぎをルワンダの子ども達をはじめ世界の多くの子ども達に渡していきたいです。最後の最後まで理事長先生が教えてくれた教育の大切さをたくさんの子ども達に伝えていきます。本当に言葉に表せないくらい感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

ルワンダの教育を考える会の仲間と一緒にこれからも活動していきます。ルワンダの子ども達に夢と希望を与えるために精一杯頑張っていきます。このような夢をみせてくれて本当にありがとうございました。子ども達の夢をこれからも応援し続けます。



I love my heros Ms. TAKAHASHI KEIKO.
Thank you so much.
May God bless and see again in
the paradise.

Kambenga Marie Louise

「ＡＤＥＳＯＣ」報告　　ウムチョムィーザ学園　2010.3.9

チャールズ校長より

2009 年 12 月現在の学費の納入状況の報告　　単位：人　＊時価換算による。単位：円

納入状況	幼稚園			小学校						合計	金額
	年少	年中	年長	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年		
100%	4	16	12	14	20	21	29	27	21	164	1,167,335
その他	2	7	1	9	6	2	7	9	6	49	170,434
0%	1	3	3	3	7	8	6	10	4	45	0
合　計	7	26	16	26	33	31	42	46	31	258	1,337,769
予算額											1,836,417
不足金額											498,648

ウムチョムィーザ学園の会計報告　３学期（７月～１２月）

〔収入〕　　〔支出〕　　円換算

項目	金額	項目	金額	項目	金額
学費	1,337,769	職員への給料	2,211,185	先生へ貸し出し	0
日本からの支援	1,643,008	設備維持経費	62,280	建設費	39,607
入学登録料	0	通信費	25,165	予備費	22,935
農業収入	0	消耗品	129,229	税金	16,998
各収入	12,612	車のガソリン代	0		
その他の収入	110,469	車の修理保険代	0		
個人寄付	94,905	研修費	97,088		
他の NGO からの寄付	0	環境整備費	71,384		
		その他の経費	175,619		
		備品	237,263		
		小計	3,009,213	小計	79,540
合計	3,198,763			合計	3,088,753
				残金	110,010

学校運営について

２００９年度（１月～１２月）の間、全校生２５８人と２０人のスタッフがいました。年度末の終了式の結果としては､学費が一人当たり年間で一人当たり 12 万 5 千ルワンダフラン(約 19, 771 円）収める事になっています。十分ではないと感じるでしょう。みなさんから頂いたご協力がなければ、なにも出来ませんでした。

おかげさまで、６年生３２人すべて中学校に入るための国家試験に全員無事合格しました。

今回ルワンダ政府が掲げている２０２０年まですべての子ども達に９年間の義務教育化の目標達成のために、各国の支援により市町村に中学校が設置されました。

学園の卒業生も２人は地元の中学校に入学し、成績の特に良かった３０人は全国各地のレベルの高い中学校に受け入れていただく事ができました。

一方で国の経済環境はとてもくずれています。貧しい子どもたちは、制服・教科書・学用品をそろえることが出来なかったり、家族のお手伝いなどの理由により、未だに中学校にいけない子どもたちもまだいます。

学園の子ども達にはルワンダの教育を考える会の支援によって乗り越えてもらいたいと思っています。

２０１０年度の新学期については、ＪＩＣＡ派遣の幼稚園教諭との家庭訪問により幼稚園児が６２名に増え全校生２６２名でスタートしました。先生達は引き続き考える会の支援により英語研修や教材により自信を持って教えています。

貧しい子ども達は生活するために働き学校にも通えません。虐殺から１５年が経過し、富める者と貧しい者の貧富の格差が拡大してきた社会構造の表れともいえるでしょう。

ＡＤＥＳＯＣの自立に向けての取り組み

９年間の歩みの中でウムチョムィーザ学園とＡＤＥＳＯＣへの支援をいただきまして心から感謝します。自立につながっていくために、これからは皆様のポケットから支援される事を頼らずに収入につながる事業を展開していけたらと思っています。とはいっても現在の状況では、まだまだ運営資金が足りません。そのためにも、この事業計画を真剣に考えてきました。物を作ってそれを展示し売る販売につなげていきたいです。家具と家を作る技術とキノコ作りをしていきます。そして現在ある物を利用して収入をあげていきます。売店の中の商品を増やしたり、所有している車の活用そして水販売の活用を積極的に改善してゆきます。私たちのこのプログラムを展開していく事を理解してください。

これだけの事業展開には１４０万ルワンダフラン（約 22,144 円）の資本が必要です。ただし、この資本を８ヶ月後には返金できるようにがんばります。

この場を借りてこれまで多大な協力をしてくださったことに感謝します。実現に向けてこれから皆さんのＡＤＥＳＯＣへの支援が少しでも軽くなるように努力していきたいと思います。

これまで、中学校建設を目標としてきましたが、さまざまな状況の変化から今年は学園の中学校はスタートしていません。ただし、親からのニーズが出たときはそれに対応できるように準備したいと思っています。

成績の良い子ども達は従来どおり私立有名中学校に行きますがその他は公立に行くことになりました。ほとんどの学生は公立の中学校に流れていますが、町にはそれらの公立の学校にさえ行けない子ども達がいるので、それらの子ども達のために３年間で技術学校を整えていこうと考えています。

おかげさまで、当学園を卒業した最初の子ども達は来年の１月には高校進学を迎えます。ルワンダでのこれから必要となってくる職業は、インフラ整備や農業などですが、子ども達の夢が一人でも多くかなうように支援を続けていけたらと思っています。

ウムチョムィーザ学園の運営が出来るのは、多くの皆様のご協力のおかげです。このような重みのある仕事を支えてくださっている皆様にウムチョムィーザ学園を代表して心から感謝申し上げます。

「人は変わるんだ…」

会員　鈴木純子より

私がルイズさんの存在を知ったのは，９４年再来日のニュースでした。それから１５年…不思議な縁がめぐりめぐって，昨年から「ルワンダの教育を考える会」を手伝っています。手伝っているといっても，たいしたことはしてなくて，ルイズさんの講演会についていって民芸品を売っているだけなのですが…。

私は，ルイズさんの講演会についていくことが好きなんです。それは，もちろんルイズさんの話を聴くことができるからという理由もあるのですが，それ以上に「人が変わる瞬間に立ち会える」からなんです。

ルイズさんの話は，そこにいる方々が，子どもだとか大人だとか年老いているとか，どんな職業に就いているとか仕事がないとか，住んでいるところが田舎だとか都会だとか，学歴が高いとか，そんなことにかかわらず，すべての方の心に届くんですよね。ルイズさんがことばを一つ一つ重ねるたびに，そこにいる方々の表情がだんだんと，だんだんと変わっていくんですが，私は，講演会のたびに，その様子を傍らで見ながら，とても嬉しくなるんです。「人は変わるんだ…」ということを実感して，本当に泣きたくなるほど嬉しくなるのです。

それは，変わってもらいたい相手がいるからとか，世間の人々が変われば世の中がもっとよくなるからとか，そういうことを期待しているのではなくって，自分のことなんです。「こんな自分もまだまだ変われるかもしれない…。」と，変わる方法を知ることができて嬉しいんです。私という人間は，もういい年の大人なのに，人を憎んだり羨んだり，自分はなんて不幸なんだと嘆いてみたり，不満を並べてみたり，その変わらない未熟さがとても悲しかったりくやしかったり…，そんな変えたいけれど，まだ変えられない自分が変われる可能性はまだまだあるんだということを感じて嬉しいのです。ルイズさんの話を聴いて変わっていく方々のように，人の話をきちんと受け止められる開いた心と，人の話をきちんと理解できる言葉の能力を持てばいいんだと，変わる方法を確認できて嬉しいんです。

今年７月には，ルワンダ人ミュージシャンのジャン・ポール・サンプトゥさんが来日します。サンプトゥさんは，ルワンダ内戦で両親と兄弟を自分の幼なじみに虐殺され，その悲惨な体験から生きる気力を失い音楽活動も停止したのですが，ある時苦しみに打ちひしがれるばかりの現状を変えることを決意して，その幼なじみをゆるし絶望的な状況から回復し，みごと音楽界に復帰を果たしたという経験を持っています。サンプトゥさんも，「自分を変えること」に成功した方なのです。そして，サンプトゥさんもルイズさんのように，「人を変える力」があるように思います。家族を殺した加害者を，どうやってゆるしたのか，それを教えてもらうことで，私の心の中にあるなかなかゆるすことのできないことをゆるすことができるようになれればいいな…とそんなことを思っています。

会員の皆さま，講演会の会場でこんな未熟な私を見かけましたら，「どうですか。変わることはできましたか。」とどうぞ声をかけてください。

ルワンダフルコンサート2010のご案内

NPO法人「ルワンダの教育を考える会」は、ルワンダ内戦で傷ついた子どもたちへの教育支援のために
毎年1回チャリティーコンサートを開催していま す。

今年は、世界を舞台に活躍中のアフリカ・ルワンダ出身ミュージシャン　ジャン・ポール サンプトゥさんと
4名のダンスチームが来日し、私たちにルワンダ音楽とダンスパフォーマンスを届けてくれることになりました。
サンプトゥさ んは、ルワンダ内戦中、幼なじみに家族を虐殺されるという悲劇を経験しています。
ルワンダフルコンサート2010では、彼がその悲劇を繰り返さないために 必要なこと・・・
「人が生きていくために必要なこと」を，音楽，ダンスパフォーマンスそしてメッセージを通して教えてくれます。
それは、遠 いアフリカのものではなく、私たちが忘れかけている「人としての生き方」を改めて考えさせてくれる
でしょう。

皆さんの参加をお待ちしております！

<プログラム>
一部　ジャン・ポール　サンプトゥのメッセージ
「ルワンダの内戦を乗り越えて～人が生きていくために必要なこと」
通 訳：NPO法人ルワンダの教育を考える会 副理事長 カンベンガ・マルールイズ

二部　ジャン・ポール サンプトゥ＆ダンスチーム　アフリカンミュージックコンサート

三部　ジャン・ポール サンプトゥ＆ダンスチームによるワークショップ
～アフリカンドラム、ダンスパフォーマンス体験
※上記は、あくまでも一例です。開催地ごとに内容が異なります。

<開催会場>
7月2日（南相馬市）、3日（福島市音楽堂）、5日（新潟市巻町）、7日（会津若松市※）、9日（仙台市）、10日（兵庫県※）、11日（広島県※）、14日（米沢市）、16日（須賀川市）、17日（大熊町）、18日（新潟市）
※印は準備中です。

<お問い合わせ>
開催地ごとの会場や料金については、事務局までお問い合わせください。
ホームページ（ http://concert.rwanda-npo.org/ ）でもご案内しています。

○チケット販売及び会場にて、ルワンダの写真展及び民芸品を販売いたします。
お手伝いいただける方を募集しております。

Jean Paul Samputu（ジャン・ポール・サンプトゥ） ミュージシャン

1962年3月15日生まれ。カナダ在住のルワンダ出身。アフリカ伝統音楽や欧米のニューミュージックの影響を受け、独自の音楽を作り出して評価され、ニューヨークリンカーンセンターなど様々なステージで活躍してきた。94年のルワンダ内戦で両親と兄弟を自分の幼なじみに虐殺され、その悲惨な体験から生きる気力を失い音楽活動を停止する。しかし、苦しみに打ちひしがれるばかりの現状を変えようと決意し、その幼なじみをゆるすことで、絶望的な状況から回復し、音楽界に復帰を果たした。
復帰後、03年には、コウラ賞（アフリカのグラミー賞）を受賞、04年には、米国で行われた「ルワンダ内戦終戦10年式典」に招待され公演を行い、現在は世界中で演奏活動を行っている。
また、その一方、内戦で傷ついた子どもたちに音楽を通して夢を与える活動（MIZERO Children）も行っている。

INGELI（インゲリ） ダンスチーム

ルワンダフルコンサート

夏のコンサート
７月１６日（金）18：30～開催
須賀川市文化センター

Samputu＆Ingeli

お知らせ

２０１０年１月高橋啓子理事長の死去に伴い、理事会にて次期総会まで副理事長であるカンベンガ・マリールイズが理事長代理をつとめることになりました。よろしくお願いします。

- 次回例会　―　４月１８日（日）予定
- 総　会　　―　５月１６日（日）予定

今後総会にて、新理事長を選出しますので、当会の発展のために多くの会員の参加をお願いします。

☆各種振替口座番号のご案内です！☆

会費振込･寄付･募金

郵便振替口座：02290-0-97126
加 入 者 名：ＮＰＯ法人　ルワンダの教育を考える会

ホームページからの募金も受付中です

ソーラー発電…ソーラー発電機を増やし、電力の確保をしたいと考えています。

郵便振替口座：02200-2-77634
加 入 者 名：ルワンダ　ソーラー発電Ｐ

HELP

事務局では、事務局スタッフ及び各種イベント開催時、お手伝いくださる方を随時募集しています。（夏のコンサートに向けてボランティアスタッフを大募集中！一緒に楽しみませんか。連絡をお待ちしてます。）

―編集後記―

阿武隈川の白鳥は、鳥インフルエンザの影響で餌付けされなくなりましたが、それでも自然の中でえさをみつけて越冬し、旅立ってゆきました。　　新たな夢に向かって、あなたの旅立ちは？幸あれと祈ります。

ＮＰＯ法人ルワンダの教育を考える

理事長代理　ｶﾝﾍﾞﾝｶﾞ･ﾏﾘｰﾙｲｽﾞ

〒960-8055
福島県福島市野田町四丁目 8-20
ＴＥＬ／ＦＡＸ：０２４－５３３－８２８９
ホームページ：http://www.rwanda-npo.org
ｅ－ｍａｉｌ　:info@rwanda-npo.org